小学校社会科教育　理論研修会　終了報告

テーマ	社会認識を深め、社会とかかわり続ける力を育む社会科学習の創造
日　時	令和7年7月10日（木）
会　場	石狩教育研修センター
講　師	前田　賢次　氏（北海道教育大学札幌校　准教授）
参加者	16名

研修会の様子

石社研の主題に即し、「子どもの思考の脈絡としての生活世界の把握・社会認識・実践性」をテーマに、講師の先生より多くの示唆に富む話題や実践例をご紹介いただいた。

日々の授業において、「教科書の内容をきちんと教えなければならない」という意識から、カリキュラム・オーバーロードの課題に直面しがちである。しかし、教科書の内容のみを伝える授業で、果たして子どもたちは自分の生活世界をリアルに捉え、そこから主体的な行動へとつなげていくことができるのか、という問題が投げかけられた。

はじめに芦別小学校での実践を取り上げ、子どもたちの社会認識を育てるためには、学びと実生活とを結びつけることの重要性が指摘された。まず、子どもたちにとって身近な社会事象に焦点を当て、現実と現実の中の諸矛盾を知ることで、子どもたちの中に最初の社会認識と課題意識が生まれ、その後の学習にも主体性をもって参加することができる。そこから参加型の学習を通して社会的事象を多角的に捉える経験が、更なる社会認識の育成につながっていく様子が紹介された。

続いて、もう一つの具体例として小学4年生における電気の学習が紹介された。ここでも、発電の仕組み等教科書に載っている知識を学ぶだけでなく、学校の近くにある変電所など、子どもたちにとっての「リアリティ」に寄り添った教材や題材を取り上げることにより、学びを「自分ごと」として捉えさせる工夫が必要であることが語られた。

また、近年は ICT の積極的かつ効果的な活用が推進されている一方で、AI にはハルシネーション等の課題もあり、体験や経験を伴わない知識・情報偏重の学びにはさまざまな懸念があるとの指摘もあった。社会認識を育むためには、単なる知識の習得にとどまらず、「目の前の現実からスタートさせる」こと、そして得た知識を構造化しながら俯瞰し、諸矛盾や対立の中で自分の立ち位置を模索することの大切さが語られた。

社会科の授業づくりを進めていくにあたり、いかに社会的事象を子どもたちの現実とリンクさせ「自分ごと」として捉えさせるかが重要である。体験的・経験的な学びを通して自らの考えを形成し、社会とかかわっていく資質を育てていくことの大切さを、改めて実感した講演会であった。